

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第181号

イザヤ 65:1

平成22年10月29日

イスラエル人に告げて言え。あなたがたが聖なる会合として召集する主の例祭、すなわちわたしの例祭は次のとおりである。六日間は仕事をしてよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。この日はあなたがたがどこに住んでいても、主の安息日である。あなたがたが定期に召集しなければならない聖なる会合、すなわち主の例祭は次のとおりである。

①第一月の十四日には、夕暮れに過越のいけにえを主にささげる。

②この月の十五日は、主の、種を入れないパンの祭りである。七日間、あなたがたは種を入れないパンを食べなければならない。最初の日は、あなたがたの聖なる会合とし、どんな労働の仕事もしてはならない。七日間、火によるささげ物を主にささげる。七日目は聖なる会合である……

③わたしがあなたがたに与えようとしている地に、あなたがたが入り、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。祭司は、あなたがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない……

④あなたがたは、安息日の翌日から、すなわち奉献物の束を持って来た日から、満七週間が終わるまでを数える。七回目の安息日の翌日まで五十日を数え……新しい穀物のささげ物を主にささげなければならない……

⑤第七月の第一日は、あなたがたの全き休みの日、ラッパを吹き鳴らして記念する聖なる会合である……

⑥特にこの第七月の十日は贖罪の日、あなたがたのための聖なる会合となる。あなたがたは身を戒めて、火によるささげ物を主にささげなければならない……あなたがたの神、主の前で、あなたがたの贖いがなされる……

⑦この第七月の十五日には、七日間にわたる主の仮庵の祭りが始まる。最初の日は聖なる会合であって……八日も、あなたがたは聖なる会合を開かなければならない……

レビ記23:2-36、①～⑦付加

メシアニック・ユダヤ人のゾラ・レヴィットは、神がモーセに告げて守ることを命じられたイスラエルの七つの例祭に、神の創造のデザインが反映されていることに気がつきました。人の懐胎について婦人科医の話を聞いているうちにレヴィットはイスラエルの主の例祭と胎児の成長過程に密接な関連があることを発見したのです。今月は、レヴィットの発見に基づいて、神の摂理と定められた掟との相関関係を考察することにしましょう。

婦人科医はレヴィットに懐胎によって胎児がどのように成長するかを図を見せながら説明し始めました。

「最初の月の十四日に子宮に卵が現れます。妊娠するには排卵後、二十四時間以内に受精しなければなりません。さもなければ、寿命の短い卵子は消滅します。受精卵は二～六日で子宮の壁に着床し、成長し始めます。」ここまで聞いたときレヴィットは、レビ記23章の「**第一(ニサン)月の十四日**」の①『**過越の祭り**』をまず思い起こしました。ユダヤ人家庭で過越の食事にいつも“ベイツァ”と呼ばれるローストした鶏卵が出されることの意味をレヴィットはこのとき初めて知ったのです。次に、②『**種を入れないパンの祭り**』が過越の祭りの直後の「ニサン月の十五日」に始まり、さらに、③『**初穂の祭り**』が過越の祭りの後、二～六日の間に祝われることが思い起こされました。まず種が地に落ちて死ぬことによって、穀物の初穂が収穫されることと、その初穂を神の御前に揺り動かす儀式によって神にささげられることにより、引き続き全収穫が確約されるという主の例祭の意味が、受精卵が着床して妊娠が次のステップに進むこととの関連でレヴィットには見えてきたのでした。

この「過越の祭り」と「種を入れないパンの祭り」はイスラエルにとって非常に重要な祭りで、一つの祭りであるかのように密接に関連して語られ、イスラエル史においては、神の裁きをもたらされた多くの重要な出来事がこの祭りのときに起こったのでした。最初の人々が神のご命令に背き、サタンの命令に従い「園の木の実」を食べたとき、人はサタンの支配下に置かれ、サタンの種が子々孫々、人の身体の中に宿ることになったのでした。これが聖書が一貫して「パン種」にたとえて語っている罪です。パンには身体が象徴されており、本来は罪とは縁のない身体であったはずの人に、墮落以降罪が入り、子孫はすべて罪の子『パン種入りの身体』で生まれてくることになったのです。まさに受精した瞬間、胎児の成長はパン種とともに成長することになるということで、このことは、誕生直後から人の細胞の死が始まるという事実から明らかです。罪の報酬は死であると聖書は明言しており、罪によって死がもたらされることになったことは、人が生まれた直後から死に向かう人生を歩みだすという事実が証しているのです。成長の度合いが細胞死の割合よりはるかに勝っている成長期にもすでに死が始まっているということは罪の存在を物語っているのです。もし神がご介入されなければ、人は罪に滅びる以外にないのですが、神はご自分の側から救いの手段を備えてくださり、人に「罪に汚れた肉の身体」に代わるものは

やサタン種の種とは無縁の「新しい甦りのからだ」を与える道を開いてくださったのでした。この神の人類救済の御計画が、①～③の祭りに象徴されているのです。すなわち、神は「種を入れないパン」に象徴される罪のない御子キリストを「過越の小羊」として十字架上でほふり、三日後に「初穂」として死から甦らせることによって、キリストを救い主として信じる者に、朽ちることのない新しい「甦りのからだ」が与えられることを確約してくださったのでした。神はサタンの陰謀を逆手にとるメシヤによる勝利の道を備えてくださったのです。

婦人科医は「五十日になると」と言い、腕、手、指、足、頭、目、口、鼻などが区別できるまでに成長した胎児の絵を見せ、「頭、胴体の区別がはっきりし、人の体形になります。それまでは、山とも海とも名状しがたいのです」と、説明しました。レヴィットは心の中で即座に「ペンテコステだ！」と叫んでいました。大麦の初穂を神に奉獻する③の『初穂の祭り』の日から満七週を数えた五十日目の日曜日は④『七週（五旬節、ペンテコステ）の祭り』です。この祭りの日に、教会、一キリストを信じ、救われた者の共同体一が誕生したのでした。この日を境にキリストを信じる者の共同体がだれの目にも明らかに、形として存在するようになったのです。産科学では、受精卵を「七週六日」までは「胎芽」、八週以降は「胎児」と区別しています。神の御前に初穂の束が奉獻された日、すなわち『初穂の祭り』からまる七週を数えたペンテコステの日はまさに「第三（シバン）の月の六日」で、この日は新約時代に聖霊降臨日として知られるようになりました。罪ある人間に神の霊が降り注がれたことにより、キリストを受け入れる信仰によって罪の身体のまま、神に受け入れられる新しい道が開かれたのでした。初穂としてご自分をささげてくださったキリストの贖いの死によって、罪の奴隷であった古い自分と、罪赦され、聖霊に導かれて生きることになる新しい自分とに画期的な区別、一線が画されたのです。

次に婦人科医は「七ヶ月第一日までに、胎児の聴覚は聞いたり、子宮の外の音を聞き分けたりすることができるほどに発達しています。聞く能力の始まりです」と図を見せながら説明しましたが、言うまでもなくレヴィットは、「第七（ティシュリ）月の第一日」の⑤『ラツパの祭り』を思い起こしていました。さらに「七ヶ月十日ごろには、赤血球中のヘモグロビンが母体から独立し、胎児自身に属するヘモグロビンに変えられます。このときから、胎児は自ら、身体を支えるヘモグロビンを造っていくこととなります」と婦人科医が説明したとき、それは明らかに、「第七月の十日」の⑥『贖罪の祭り』への言及でした。一年に一度この日に、大祭司はいけにえの動物の血を至聖所に持って入り、自分をも含めた全イスラエルの罪の贖いのための執り成しをするのです。人々の一年間の罪に対する神の赦しがもたらされるこの日は、罪を聖める血により新たな生命が約束されるわけで、大祭司の役割は責任重大、イスラエルの死活を担う最大行事となります。引き続き、「七ヶ月十五日ごろには、肺は完全に発達します。これより前に生まれてしまうと、胎児は大変な呼吸困難を起こすこととなりますが、身体全体はもうしっかりしています」との説明を聞きながら、レヴィットは主の例祭の最後の祭り「第七月の十五日」の⑦『仮庵の祭り』を思い起こしていました。栄光ある神の霊、シェキナ・グローリーの御臨在を祝い喜ぶ仮庵の祭りは、新天地への入植直前の最後の祭りで、新約聖書では、通常「息、呼吸」と翻訳されているギリシャ語の“プニューマ”は「霊、聖霊」に言及される用語でもあることを、レヴィットは思い出したのでした。

さらに、「九ヶ月十日で胎児が体外に生みだされる、いわゆる出産で、誕生後八日目にユダヤ人家庭では、男児に割礼が施されます」との婦人科医の説明を聞いたとき、レヴィットには『過越の祭り』の後、ちょうど九ヶ月と十日後に祝われる『ハヌカの祭り』が思い起こされました。ハヌカの祭りは主の例祭には含まれていないのですが、「光の祭り」、「宮きよめの祭り」（ヨハネ 10:22）としてキリストの時代にはすでに守られており、「第九（キスレウ）月の二十五日」から「第十（テベテ）月の二日」まで八日間祝われたのでした。これは、ダニエルが「荒らす忌むべきものを据える」冒流行為として預言した、ギリシャのセレウコス王朝のアンティオカス四世・エピファネスの、祭儀上汚れた動物の豚をエルサレム神殿にささげるといふ侮蔑に対し、憤ったユダヤ人マカバイ家の勇士たちが謀反を起こし、ちょうど三年後の 165BCE「キスレウの月の二十五日」に神殿を奇蹟的に奪還、聖めて神に再奉獻した画期的な出来事を思い出す祭りで、「奉獻」の意の“ハヌカ”と名づけられたのでした。モーセ五書を解釈したユダヤ教の経典「ミシュナ」の解説書の「タルムード」は、祭りが八日間祝われるようになったのは、再奉獻のときに一日分の明かりをともし分量の油で、八日間も明かりをともし続けることができたという奇蹟に因むと記しています。そこで『ハヌカの祭り』が始まると、従来の七枝の“メノラー”ではなく“ハヌキヤー”と呼ばれる九枝の燭台に、「シャマシュ」、あるいは、「しもべのろうそく」と呼ばれる点火用の九本目のローソクで、日を追うごとに一本ずつローソクが点火され、八日目には全部の火がともされるのです。ハヌカの祭りの時期がちょうど西欧諸国のクリスマスの時期に一致することから、今日ユダヤ人家庭ではクリスマスの時期にハヌカを祝う傾向が定着してきています。後世加えられた祭りとはいえ、八日目の割礼で神に初子を奉獻することと八日間の『ハヌカの祭り』には明らかに相関関係が見られ、ここに、天地万象すべてのデザイナーがお一人であることが反映されているのです。このように、三千五百年前、まだだれも妊娠期間のことを知らない時代、神は主の例祭に神の人間創造のデザインを見事に織り込まれたのでした。【出エジプトの出来事に因む①～④の祭りの意義については拙著『一人で学べる出エジプト記』（文芸社）p.91~101、183 参照】